

## 病気とは何か。病気と心の有り様 (1)

仁志天映 (千島学説研究会代表)

今回は、「ガン治癒と精神及び信仰」について考えてみたいと思います。

去年は、新たに75万人がガンと宣告され36万人が亡くなりました。毎年1万人ほどガンによる死亡者が増え続けています。また、大病院でガン三大治療を受けても治る見込みなしと言われ、転院せよと病院から出される患者、がん治療の恐ろしさを感じ取り、自ら逃げ出す患者など、治癒への道筋がわからず彷徨する「ガン難民」が後を絶ちません。現代医学は限りなく進歩しガン療法も発展しているとの思いとは真逆の現実が進行しています。

では、何故、ガンがかくも恐れられ、死病になってしまったのでしょうか。そして、ガンによる死亡者は減ることがないのです。

昨年9月、東京豊島区医師会館で、「ガンにいかに対処するか」をテーマにガンに対してのセミナーを開催しました。ここでは、ガンは如何なる病気であり、どのような道筋を歩めば治癒できるのか。また、ガンを克服した方々や現在治療への道を歩んでいる方の話も伺いました。

まず、結論から言いますと、ガンは死病でも、激しい痛みを伴う病気でもないという事です。確かに少々時間はかかります。ガンは10年ほどかかって、1平方センチメートル位の大きさになる、ゆっくり進行する病気ですから、急死することはありません。ゆっくり養生しながらガンをなくせばよいのです。

現代医学、医療は、アロパシー医学といわれています。アロパシー医学とは、化学薬物、放射線、手術などで、とりあえず症状を消す。あるいは緩和するという医療体系のことです。病気の原因もわからないまま、患部の切除、化学薬剤投与のみの医療なのです。高血圧も、糖尿病も、高コレステロールも、アトピー性皮膚炎も、化学薬剤を長期に服用し、生涯使い続けなければならないのです。その結果、薬の副作用により、新たに病気が現れるという、医原病が患者さんを覆いつくしているのです。現代医学は対症療法といわれる所以は、以上のことからわかると思います。とりあえずその場凌ぎの療法ですから、ほとんどの病気は治ることはあり得ないのです。ガンもアロパシー医学の範疇に入ります。

さて、病気と精神及び信仰についてですが、偉大な宗教家は医学の大家でもあります。実際、禊教の開祖、井上正鐵翁は、指圧貫通の術（血液循環を良くし、気を巡らす手技療法）や、観相学中興の祖・水野南北に師事し、食(粗食・少食)が健康ばかりでなく、運命緒も左右することや、調息の法も習得しています。また、袂いの修行を通しての、医学用語で言えば、自律神経の調和（心の安寧）

と身体(胃と腸を中心とした内臓など)の活性化。開祖は、この祓いの修行こそ、心身に及ぼす影響が大いなることを繰り返し語っています。以上のことから観ても病氣癒しと信仰の関わりがいかに深いものであるかがわかります。

問題を深めましょう。さて、かつて、信仰と病氣、「ガンは信仰によって治るか否か」を巡って、生長の家の谷口雅春総裁と九州大学心療内科の池見酉治郎教授との論議がありました。

ことの発端は、『精神科学』(1964年、204号)によれば、池見教授から谷口総裁に、ガンが心の方面から治った実例があったら知らせて欲しいとの連絡があったので、谷口氏は、医師に胃がんと診断されたが信仰によって治ったという女性と他の一人の女性を池見氏へ訪ねさせました。検診の結果、その女性のガンは治癒しているといわれたので、対談中の写真と共に『精神科学』誌に、池見教授の検診を受けた結果、両婦人とも、完全に治っていると断定されたと発表しました。ところが、それを讀んだ池見氏から、あれは、後からレントゲン写真を取り寄せて研究した結果、ガンではなかった。それなのにガンが精神指導で治ったというのを池見が証明しているかの如く言い、自分が対談している写真を承諾なしに掲載したのは怪しからぬと横槍を入れられたということです。

さて、この論議を通じて病氣治癒と信仰、或いは、医学と宗教・信仰の深い関わりをより深めることこそ、ガンを含めた病氣克服の道であることを明らかにしたいと思います。

次回は、谷口氏、池見氏の主張を具体的に提示しながら、考えたいと思います。  
(みそぎ第9号より)